

Track 3 お風呂で早漏肯定レッスン

「……手首は大丈夫？ 痛いところはない？」

「少し痣になってしまったわね。」

でも、手首に残ったこの痕が愛おしい……
ちゅっ……ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……」

「ごめんなさい。」

久しぶりに、あなたに会ったものだから、
色々な感情が溢れてきてしまったの……」

「あと、お酒に酔って、ぼーっとしてる顔、
かわいくてずるい。」

あんなの、お持ち帰りされるに決まってる」

「お仕置きしてる間もずっとかわいかったし、
ほんとに、お部屋に閉じ込めておきたくなる……」

「……それに、あなたのも」

「私の膣内（なか）に閉じ込めて、
しまっておきたくなっちゃう……」

「くす……おちんちん洗うから、手をどかしてくれる？」

「もう、まだ恥ずかしがってるの？」

「お風呂で身体を洗うとき、
大きくなってしまっても、私は何とも思わないわ？」

「あなたと付き合ってから、
少しは男性のことを理解できたつもりなもの」

「それに……えっちなことを考えていても、
考えていなくても……」

「あなたのが大きくなってくれと、
私は嬉しい……本当よ？」

「だから、あなたも……
私におちんちんを洗われるのが、
幸せだって思ってたほしい……」

「あなたと離れて生活をする、
いっしょにお風呂に入るのが、待ち遠しくなるの」

「私には、あなたとこうやって
過ごす時間が、本当に癒やしなのよ？」

「あなたの前では、
ありのままの自分でいられるから……」

「ふふっ、ごめんなさい。
あなたの反応がかわいくて、
つい、おちんちんを洗い過ぎちゃう……」

「気持ちよかったら、出してもいいのよ？
私がない間、ずっと我慢させてしまったし、
今だってそう……」

「おちんちんから出すのを恥ずかしがって、
頭の中で余計なことを考えようとしてる……」

「あなたは、学生の頃からそうだったものね。
すぐ出ちゃうおちんちんは情けないからって、
必死に我慢しようとして……」

「そんなあなたがかっこよかったから、
おちんちんを触ってばかりいた気がする……」

「……だって、情けないおちんちんにしたかったんだもの」

「すぐ出ちゃうおちんちんにしたかったの。」

あなたの、ダメなおちんちんがかわいくて好きだったの」

「おちんちんのこと悩んでるあなたも……」

愛おしかったから……」

「ひどい女でごめんなさい。あなたは嫌だったわよね。
男の人の自信を奪うようなことばかりされて……」

「時間を巻き戻せるなら、
私と出会う前に戻りたい？」

「おちんちんの自信……取り戻したい？」

「情けないおちんちんのままでいいの？」

男の人は、女の子に早漏だと思われたくないのでしょうか？」

「だから、あなたはいつもがんばって、我慢しているのに……」

「……………」

「早漏」

「そ、う、ろ、う……」

「こんな言葉に興奮してしまうなんて、かわいい……」

「……でも、私と付き合っている限り、あなたが自分のおちんちに自信を持つのは、難しいかもしれない」

「だって、私はあなたの身体を知りすぎてしまったもの……」

「どんな風に触ればおちんちんが気持ちいいかも」

「どうすれば、あなたが我慢できずに、おちんちんから出しちゃうかも……」

「みんな、わかってるの。」

わかるようになってしまったの……」

「だから今、あなたが我慢できているのは……
私にその気がないだけ……」

「何も考えずに、私に身を委ねて？」

「気持ちいいのを我慢しなくていいの。」

おちんちんから出ちゃいそうになっても、
そのままでいて？」

「そう……声も我慢しなくていいから……」

ああ、すごい……

おちんちん、どんどん大きくなってる……」

「気持ちいい？ もっと、長く味わっていたい？」

おちんちんから出すの、もったいない？」

「……大丈夫よ？」

ずっと、気持ちいいのを続けてあげる」

「ほら……今、出ちゃいそうになった……」

「でもこっちの刺激だと、もどかしいだけで、
おちんちんから出せないでしょう？」

「ふふっ、腰が動いてきちゃったわね。
あなたが我慢できない刺激はこっち……」

「先っぽを手のひらで包んで……
少し乱暴にするの……きちんと、私の目を見て？」

「そう、その目……
気持ちよくて逆らえないっていう、
あなたのその目がかわいくて好き……」

「だから、逆らわなくていいし、逆らわせない……
あなたの頭の中を、気持ちいいでいっぱいにする……」

「あなたが我慢しなくても、私が刺激を調節するわ？」

「……そうやって身悶えする姿も、本当にかわいい」

「あなたって気持ちよくなると、
言葉の種類がどんどん少なくなっていくの」

「『すごい』とか『ヤバい』しか言えなくなって、
最後は……」

「『出ちゃう出ちゃう』って」

「このまま、おちんちんから出したい？
私はいつでもいいけれど……お風呂からあがったあと、
できなくなっちゃうかもしれないわ……」

「私とせつくすしたくない？」

この元気なおちんちん、

私のおまんこに挿れたくないの？」

「ふふっ……おちんちんを、

こんなにビクビクさせて……

お返事をしてくれてるのね」

「でも、こんなに弱ったおちんちんじゃ、
挿れてもすぐ、出ちゃうんじゃない？」

「ただでさえ、あなたは……」

「早漏、なんだし……」

「謝らないで？」

私はあなたの早いおちんちんが好きなの。

早漏のあなたが、かわいくて仕方ないの……」

「おまんこに挿れて、

十秒も、もたないあなたのおちんちんが好き」

「女の子みたいな声を出して、

おちんちんから出しちゃうあなたが好き」

「早漏でいいの。何回も何回も出してくれる、
あなたのおちんちんが大好きなの」

「あなたって、一度おちんちんから
出ちやいそうになると、

その後に休みを入れても、
すぐ出ちやいそうになるのね……」

「今だってほら……休んでも、
十秒保たなくなってる……」

「その時間さえ、
どんどん短くなって……」

「マラソンを走る時は、あんなにすごいのに、
おちんちんのインターバルトレーニングは、
苦手みたいね……」

「もうこんなに、先っぽが真っ赤になって……
軽く息を吹きかけただけで、びゅーびゅーしちやいそう……」

「どうする？　びゅーびゅーする？
おちんちんから、びゅーびゅーしたい？」

「それでも、やっぱり我慢しようとするのね。
男の人の本能なのかしら……」

「私はその気になれば、
いつでも終わらせられるって言ってるのに……」

「……それなら、もっと女の子みたいな声を聴かせて？」

「喉を震わせながら……ここ……」

ん、ちゅっ……ちゅっ、ぽっ……

はあ、喉仏が震えるのを、私の唇で感じさせて？」

「んん、ちゅう、ちゅううっ……ぽっ！」

「くす……女の子じゃなくて、

ケダモノみたいな声になっちゃってる……」

「そんなあなたを知っているのは、私だけ……」

「あなたのおちんちんが、すぐ出ちゃう、

ダメな子だっというのを知ってるのも……私、だけ……」

「長くお風呂に入っていたら風邪をひいてしまうし、

そろそろ、終わりにしましょう？」

「……我慢しても無駄ってわかるわよね？」

「こうやって、おちんちんを上に向けて……」

噴水みたいに、あなたがたくさんびゅーびゅーするところ……
見せてくれる？」

「ああ、すごい声が出る……おちんちん、気持ちいいのね……
いっぱい出せる？ 勢いよく、おちんちんから精子出せる？」

「私の見てる前で、びゅっびゅって……
びゅっびゅって……」

「なぎささんも莉奈さんも知らない、
私だけのかわいいおちんちん……」

「赤ちゃんを作る予行練習、してみて？」

「お風呂から出たあと、どんな風にしてくれる？
私のおまんこの中でどうしたいの？」

「見せて？」

「あなたが上手に赤ちゃんを作るところ……
ほら、がんばれる？ 元気よく、びゅーびゅーできるっ！」

「あ……ああ……出てる……いっぱい……
本当に、噴水みたい……」

「これが好きなの……量も勢いも……すごい……」

「あなたに、お腹の奥でびゅーびゅーされると、
気を失うぐらい、気持ちいいの……
あなたが、それを私に教えたの……」

「あなたのは、私をダメにするおちんちん……」

「だから、怖いのだ。」

他の女の子が同じようにされたら、
ぜったい、あなたから離れられなくなる」

「ダメな女の子にされちゃう……」

「……まだ、おちんちんがなれる？」

「今度は、私のお腹の中で、びゅーびゅーしてほしい……」

「離れている間、ずっとそうして欲しかった。

赤ちゃんができちゃうぐらい、

いっぱいいっぱい、出して欲しかった」

「……でもその前に、汚れたおちんちんを、
綺麗に洗わないといけないわね」

「いつも、お風呂の時間が長くなってしまって
ごめんなさい」

「大好きよ。……ちゅっ」